

令和2年度学校評価における自己評価と学校関係者評価

真岡高校全日制

1 自己評価について

(1) 重点目標の達成に向けた具体的な取り組み状況や達成状況

重点目標

「真高プライド」の涵養

「健全な自尊心（＝自分と他者との人格を大切にする心）と自負心（＝自分の取り組みに自信と誇りを持つ心）」、そして、真の「教養」を身につけさせる」

努力点

①「文武両道」および「人材育成」の実践

②進路目標に応じた指導の徹底

③主体的な学習・生活態度の確立に向けた取り組み

④諸課題への積極的な対応（安全・安心な学校づくり、いじめ防止対策、大学入試改革への対応等）

- ・「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善と教員の授業力向上を図っている。特に、今年度は、県教育委員会の「学力向上に向けた指導体制モデル事業」における「教員指導力向上事業」の指定を受け、英語科において外部講師を複数回招いての「教科指導力向上研修」を行った。また、生徒に「確かな学力（基礎力）」、「思考力・判断力・表現力」、「問題を解決していく実践力」を身につけさせるため、第1学年「学修状況評価」、第2学年「テーマ研究」を実施している。
- ・生徒は文武両道を実践し、学習、部活動に日々積極的に取り組んでいる。今年度は、コロナウイルス感染症の影響で各種大会が中止となったが、その中でも、空手部と写真部が県予選を突破し関東大会の出場権を手にした。
- ・「教育相談アンケート」の中に自己有用感を感じているかを問う設問を設け、その結果を指導に生かす取組も行っている。また、スクールカウンセラーの配置により教育相談体制の充実を図ることができた。
- ・大学入学共通テストでの記述問題導入見送りやコロナウイルス感染予防対応等に対して、進路指導部と学年が連携して速やかに生徒・保護者に進路説明会を実施し、混乱することなく無事に受験することができた。
- ・「学校評価のためのアンケート」の「生徒の人間の成長を促す取り組みに力を注いでいる」に対する回答の肯定的意見が生徒84%、保護者75%、教員92%となり、昨年度と比較して、生徒と教員で増加しており、全体としては肯定的意見の割合が高くなっている。

(2) 学校運営の取り組み状況

- ・「至誠」を基本精神に掲げ、校長の学校経営方針の下、教職員が一丸となって、生徒の指導、援助に当たっている。また、生徒も、文武両道を実践し、学習にも部活動にも日々積極的に取り組んでいる。
- ・PTA、同窓会をはじめ、地域の関係諸機関との連携により伝統ある地域の進学校として将来リーダーとなるべき人材の育成に取り組んでいる。
- ・真高生としての基本的な生活習慣を身につけさせるため、昨年度作成した新入生初期指導計画の実施を予定していたが、年度当初約2ヶ月が休業となり実施できなかった。

(3) 校務分掌各部・教科・学年の取り組み状況

- ・生徒の主体的な行動力を高めるため、各校務分掌が互いに連携を取りながら生徒の指導・援助を進めた。特に、進路指導部では、各学年の進路係と連携して、「3年間の指導の流れ」に沿った指導を行った。また、生徒指導部は、生徒のあり方生き方を自ら考える姿勢を醸成するような指導を心掛けた。

(4) 授業改善及び学力向上に向けた取り組み状況や達成状況

- ・生徒の視点に立った授業改善を進めるとともに、主体的に授業に取り組もうとする態度を育むため、「授業に関するアンケート」を実施した。また、各教科の分析結果を職員会議で共有した。
- ・昨年度から始めた第1学年「学修状況評価」において、セルフマネジメント力の向上や学力の向上を図った。
- ・「学校評価のためのアンケート」の「質の高い授業を行うように努めている」の回答で、肯定的意見が生徒83%、保護者83%と高い評価を得ることができた。

(5) 開かれた学校づくりの取り組みに対する状況

- ・ホームページや学校だより（白布ヶ丘だより）、一斉メール等を通じて、学校の情報が正しく保護者や地域に伝わるよう広報活動に努めている。学校だよりは近隣地域の回覧板に添えて配布していただいている。
- ・例年、生徒会や部活動等で生徒による近隣の中学生との交流を行っていたが、今年度は実施できず残念であった。

(6) 生徒・保護者アンケート結果を踏まえての評価

- ・今年度は、新型コロナウイルス感染症により学校生活において多大なる影響があり、単純な過年度比較はできないが、ほぼすべての質問において肯定的意見が8割から9割以上を占めており、高い評価を維持している。
- ・「わからない」という回答の多い項目については、広報活動等を通して、より分かりやすい説明を続けていく。

(7) 教職員の意識改革及び意欲向上に向けた取り組み状況

- ・本年度の重点目標、努力点に即し、昨年度から始まった第1学年「学修状況評価」、第2学年「テーマ研究」等の新しい取組も実践されており、教職員の意識改革も進んでいる。また、令和4年度からの新課程下で実施される「観点別評価」についても研究を進めており、次年度も導入に向け全教科で検討を進めている。
- ・進路指導部が開催する進学指導研究会と出願大学検討会においては、直接生徒を指導する担任団と進路指導部の各教員が大学学部学科についての情報や進路選択についての考え方等を共有し、学校全体で生徒の進路指導を行っていく体制づくりがさらに固まりつつある。
- ・本年度は、新型コロナウイルス感染症により例年のような学校運営ができなかったが、そのような状況下でも「ピンチをチャンスに」と教職員が一丸となって教育に取り組むことで、一定の成果を上げることができた。

2 学校関係者評価について

(1) 評価組織（評価者）

学校評議員（保護者を含む）を学校評価委員に委嘱して評価を行った。

(2) 評価結果

- ・学校からの説明やアンケートの結果から、コロナ禍の中で大変な1年であったが、そのような中でも教職員が一丸となつての熱心な教育活動により成果を上げていることがわかった。
- ・生徒アンケートの回答から、先生方が丁寧かつ細やかな指導をしていることがわかる。生徒たちが先生方に感謝していることはすばらしく、今後もこのような指導を継続していただきたい。
- ・生徒の「自由記述」で「素晴らしい学校です。」や「真高に来て良かった」とあるのは、本当に素晴らしい。今後も『日本一の男子校』として指導をお願いしたい。
- ・情報発信についてのアンケート評価が高くないのは、保護者の不安の表れではないか。今後は、情報発信としてのホームページの活用や、電子黒板などのI C機器の導入など新年度に向けて努力していただきたい。
- ・先生方が生徒一人ひとりに目をかけ、声を掛けてくれるのは保護者としては大変ありがたく思っている。
- ・進路内定者が、学びに向かうクラスの雰囲気壊さないような指導にも力を入れていて、安心して受験に望めるような配慮がありがたい。